

まなびあい学会での発表に向けた 学生指導を振り返る

—2017年度社会福祉援助技術現場実習の学びから—

富田 文子
(福祉学科教員)

岡 桃子
(福祉学科教員)

I. はじめに

2017年度まなびあい学会での発表について、学生とともに3名の教員で協働した経過を残しておきたい。学生間の支え合い、学び合いによる輝きや成長を間近で見られただけではなく、私たち自身が教育者として成長させてもらえた軌跡である。

次の学生と目標に向かって歩き出すために、今再び、あの努力を思い出しながら、しっかりと靴紐を結んでおきたい。

II. 福祉学科の「実習」に関する講義の構成

1 実習に関する各講義の位置づけ

本学科では、社会福祉士及び精神保健福祉士の養成を行っている。

「社会福祉援助技術現場実習」、または、「精神保健福祉援助実習」の履修を希望する学生は、2年次以降（実習前年度）の秋学期に「社会福祉援助技術演習1・2／精神保健福祉援助演習（基礎）」を履修し、相談援助の現場で活用される知識と技術と価値を学ぶと同時に、3年次以降（実習当年度）に実習を行う領域を選択する。実習当年度には、社会福祉分野の6領域（高齢者福祉／障害児・者福祉／地域福祉・公的扶助／更生保護／医療福祉／児童・女性福祉）と精神保健福祉領域に分かれて、10名程度の学生で構成される「実習指導」クラスに所属する。そこで、各学生は、より専門的な知識と技術の習得をし、様々な福祉施設や医療機関等において社会福祉は180時間以上、精神保健福祉は210時間以上の実習に励むことになる。

ただし、実践の現場においては、複数の領域にまたがり困難を抱える人々を支援する場合が多い。そのため、「社会福祉援助技術演習3／精神保健福祉援助実習指導2」を必修科目として設け、多領域の専門性を学習することに加え、自身

の専門性を客観的に捉えるよう、学習のまとめに取り組むことを目指している。具体的には、学生同士が、実習で考えさせられた事例等を実習生としての関わりを含めて、事例報告として発表し、相互に実習の振り返りを行っている（表）。

そして、例年1月に、実習の総括として、実習指導者を招いて学びの成果を発表する、実習報告会を開催している。

表 福祉学科の実習にかかる講義の形式

年度	科目名		開講	形態	内容
	社会福祉	精神保健福祉			
実習前年度	援助技術演習 1-2	援助技術演習(基礎)	秋学期	領域横断	相談援助全般の知識と技術の獲得
実習当年度	実習指導	援助実習指導 1	通年	専門領域	専門領域の知識等の習得とグループ学習
	援助技術演習 3	援助実習指導 2	秋学期	領域横断	現場実習の振り返りと事例報告

2 講義構成上の領域間の相互学習の困難性

社会福祉と精神保健福祉の養成課程が異なり、講義の設定や実習時間等も異なる。そのため、社会福祉分野を選択した場合には、領域間での学習はあるものの、精神保健福祉領域の学生とは相互学習の機会を設けることができない。同様に、実習報告会では、すべてのクラスが同時に発表を行うため、互いの成果を聞き合う機会がないことも非常に残念でならない。別な機会を設けることも、講義回数等によって困難であると言わざるを得ない現状がある。

Ⅲ. 福祉実習教育室の機能と役割

福祉学科の実習教育の根幹を担うのが福祉実習教育室である。福祉実習教育室には、助教や教育研究コーディネーター等の教職員が配置されおり、実習の管理全般を担っている。具体的には、実習先との日程調整や実習内容の確認といった学生に関する事項、100を超える機関に対して国家資格及び実習指導者資格を有するか否かの確認と、指導者ごとの関係書類の取り寄せといった事務、実習の事前・事後学習を含む学生指導及び相談対応、その他連絡調整等に関するサポートを行う機能を有している。

助教が担う役割は、実習教育に関する学生指導である。実習に臨む学生たちは、実習前の段階から、困難な状況にある支援を必要とする人の気持ちに寄り添い、解決の糸口を探すことに対する覚悟を固めたり、各支援機関や専門職の機能を正しく理解したりと、様々な課題にぶつかりながら、実習を希望した経緯も含めて「実習計画・実習テーマ」として自分の言葉を紡いでいかなければならない。また、実習期間中は、慣れない環境での日々の学びについて、疲れた体に鞭を打ち

つつも、実習ノートにまとめることに努める。また、実習を終えた後には、実習で得た知見や考察を、後輩たちや現場、地域社会に還元いくことを目指して、実習報告会や実習報告集として形にすることに注力していく。特に、実習報告会では、テーマ決めに始まり、発表内容の決定から資料作りまで、まとめ上げる課程は、やりがいはあるものの、学生としては非常に試行錯誤に追われる日々が1か月程度続く。

このように、学生たちは事前学習を行い、実習を乗り越え、振り返りの事後学習に至るまで、体力的にも精神的にも多くの労力を費やす。また、実習を通じて自己と対峙することになるため、非常に苦しみ、目を潤ませることがある。そこから、学生が自分自身の強みと課題を知り、一生のテーマを見出していけるよう、教員は伴走する思いで学生指導を行っている。

Ⅳ. 「実習指導」でのまなびあい学会への参加の契機

1 富田ゼミの5名の学生との学びの場

既述の講義構成上の課題があることも見えてきた着任2年目、実習指導の担当として、5名の学生を受け持つことができた。学生一人ひとりには非常に聡明であり、自分の実習テーマを作成するにあたり、丁寧に障害や機関の特徴等を調べ、実習生として利用者に関わる思いを深く考え、整理に努めていた。加えて、春学期に実習した学生が、現場で経験した困難事例について学生同士で共に考え、そして支え合え、学生ながらに「支援」の本質を見つけるよう努められるメンバーであると実感していた。講義を重ねる度に、私自身が学生だった時分には、彼らのような考えを持ち、他者を尊重することができていたのだろうかと同様に、彼らの大いなる成長を感じずにはいられなかった。そして、個人の実習から学んだことをゼミ内のみで共有し、個人の学習の帰結に留めるのではなく、それぞれの視点から学んだものを擦り合わせて、何かしらの「障害」に関する考えとして、一つにまとめることはできないだろうかという思い駆り立てられた。そこで、春学期の最終講義を前に、学生たちに「みんなで障害に関する何か一つのことを考えてみるのはどうだろうか。そして、まなびあい学会で発表してみないか」と声をかけた。快い返答であったかと言われれば、そうではなかったように思い返される。それでも、嫌だということではなく、自分たちにどのようなことが考えられるのか、といった戸惑いや迷いであったと受け取ることができた。彼らは気づいていない自分たちの可能性を大いに開花させてほしいと願い、考察と検討を講義に組み込むという、やや強引なやり方であったものの、学びを結実させる場として、まなびあい学会への参加を決めた。

2 何を考えるか・どう考えるか

発表するためのテーマ決めは、非常に難航した。各々の関心を整理していくと、「障害理解」と「支援者として何ができるか」に二分することができたが、それを中身としながら、彼らの関心の本質は、「障害とは何か。何をもちて障害とするのか。何を支援するのか」「支援の対象は、障害なのか。それとも障害者なのか」という曖昧ながら、熟練した支援者であっても的確に答えを出すことが難しい部分を捉えていた。抽象度は高いが、地域で生活する障害者を対象とすることでイメージを膨らませながら、その大きな間に挑むことにした。

しかし、障害がありながら生活することの本質に近づくためには、学内の講義や個人の実習の振り返りだけでは不十分であると考えた。そこで、長年、在宅生活を継続するALS（筋萎縮性側索硬化症）患者の方の自宅や、知的障害者を中心に障害者雇用を促進している特例子会社を訪問することで関係する方々にその生活の一端に触れることに快諾いただいた。この場を借りて、御礼を申し上げる。

ぜひ、学生が考え抜いて発表した内容は、分科会発表報告の『社会福祉援助技術現場実習から考える「障害支援」と「障害者支援」—“その人らしさ”と“地域生活”の在り方—』をお読みいただきたい。そして、解が異なったとしても、障害とは何かを考える契機になれば幸甚である。

3 他領域の教員に対する学びの場“まなびあい学会”への招待

発表を申請するにあたり、学生たちが考えたことを、一人でも多くの人の聞いてもらいたいと強く思ったのと同時に、他学科や他領域の学生の考えに触れる機会も作りたいたいと考えていた。それは、障害について考えてもらう機会に広く設けるだけでなく、彼らが様々な課題を学ぶ契機にもなり得るからである。何より、私が学生ならば、学びの場に同級生がいてほしいと思うであろうし、教員の立場になっても、その考えは変わらなかった。そこで、他のゼミにも参加してもらいたく、共に福祉実習教育室に従事する、社会福祉分野で児童・女性福祉領域を担当している岡助教と、精神保健福祉領域の大山助教に「まなびあい学会に参加したいと思っている。一緒に出てみるのはどうだろうか」と、3回以上は声をかけたことと記憶している。勝手な申し出に対し、お二人は悩みながらも賛同していただき、今に至る。

感謝の気持ちを込めて、一旦、岡先生にバトンを渡すことにするが、一足先に立教大学を卒業された大山先生への謝意もここに記す。

V. 岡ゼミの経過と展開

1 参加の経緯と学生たちの取り組み

2017年春、富田先生から、11月のまなびあい学会の分科会に実習指導岡ゼミも参加してはどうかと誘われた。2017年度の岡ゼミは、自分の言葉で語りあえる学生たちばかりでとてもよい空気であったので、是非まなびあい学会にも参加してもらいたいと思った。近ごろの学生には単位に必要なことだけすればよいという省エネ傾向も見受けられる中、この岡ゼミは違うと言いたいところだが、学生たちも様々な活動をしており何かと忙しい。学生たちがどこまでやる気になるかわからなかった。私にとっても、受け身な学生たちをひっぱりまとめあげるのは負担であるなど色々不安を持ちつつも、とにかく岡ゼミの皆に参加の意向を聞いてみることにした。学生たちは「目標があったほうが秋学期だからなら過ごすよりもメリハリが出る」「1月の実習報告会につながるよい機会になる」ということで、全員が積極的に賛同する結果となった。

2 学生たちの取り組み

発表テーマは「平等な関わりとは何か～自己肯定感の観点から～」に決まった。発表内容の詳細は、別頁『第10回年次大会の報告』にて学生から報告されているのでここでは大枠を記す。

まず【ロールプレイ】として「約束をしたがるAちゃん」というタイトルで児童養護施設の日常場面を演じた。ロールプレイは私の経験上、大抵少し照れながら演じられ、ほほえましく見守られるものだが、かつてない素晴らしいものだった。ミュージカル俳優経験を積んでいる学生が自然と全体の演技力を引き上げてくれたのに加えて、皆のやる気があるものだから何度もリハーサルをし、それぞれの持ち味が発揮された非常に楽しい劇となった。次に【実演】として「自分たちの考える平等な支援」を可視化するため、色水を用いて表現した。親しみやすいように人気のコメディアン芸なども取り入れたのだが、実は学生の間で何度も検討がなされていた。児童養護施設をテーマとする発表でお笑い要素を取り入れるのは、観客に不快な思いをさせてしまうのではないかという懸念だ。しかし私は、全体で見た時に本気で伝えたい意思が伝わるので大丈夫だと確信もっていた。感想では「伝えようとする姿勢が伝わる、楽しい発表だった」とのお言葉をもらったが、それが一番感じ取ってもらいたいところであったため感激であった。

3 実習報告会につながる意義・他分野と交流する意義・自主性に自信をもてる意義

毎年、児童・女性福祉領域は2～3のゼミで展開される。そのため、1月の実習報告会では、ゼミ単位ごとに40分の時間が与えられ、テーマを決めて発表する構成。1年間築いてきたゼミのカラーが色濃く出ることになる。テーマをひとつ

に絞り、どのような方法で発表するかまとめていくのは、なかなかの時間と労力を必要とするため、11月のまなびあい学会に参加することは、実習報告会につながる中間的まとめの機会となり非常に有意義なものであった。また、実習報告会では他領域の発表を見に行くことができないのだが、まなびあい学会では他分野の人々と発表を共有し意見をいただけるので深い学びを得ることができた。さらに児童福祉を専門としていない人々にもわかりやすい発表を心がけることで、自分たちも初心に立ち返ることができた。

まなびあい学会発表後、実習報告会に向けて、さらに学生発案でアンケート調査なども取り入れながら考察を深めていった。学生たちは、まなびあい学会に参加したことで、「自主的な姿勢」であることにまず何よりも自信を持つことができ、私があればこれ指導せずとも、最後まで惜しみなく自主的に積極的に取り組んでくれた。真摯な学生たちの良さを最大限に引き出すことができ、私も本当に楽しく過ごすことができた。まなびあい学会に共に参加できたことを、誘ってくれた富田先生、大山先生に心から感謝している。

Ⅵ. 社会福祉や精神保健福祉を学ぶ学生に対する教員の使命

彼らは、もうすぐ卒業する。

学生の一人ひとりの人生は、学生自身が様々な人や場所を選び、経験した成功や失敗から学び、時に道を切り拓いていくものである。そのとき、大学において見たり、知ったり、学んだりしたことは、十分に生かされないこともあるだろう。学生の中には、社会福祉士や精神保健福祉士として相談を受け、社会資源を活用して、地域生活が安定し、継続できるような支援者になる学生もいるだろう。しかし、支援者ではなくても、状況や立場が異なったとしても、実習を通して出会った人々に、同僚や取引相手、消費者等として出会う機会があるだろう。また、地域住民や隣人として、社会に上手く参加できない人や、それぞれの人が抱える不便さや困難さを見聞きする可能性もある。そのときこそ、関わり方を学んできたことが生きてくるのだと思う。

だから、教員としての使命は、専門職を養成することは前提としながらも、人の生活上の困難性を見過ごして他人事とするのではなく、地域住民として、または、社会人として、自然に手を差し伸べられることが、生きやすく心地良い人間関係を構築できると知っている人材を育てていくことであると考えている。

Ⅶ. 終わりに —未来のランナーに託す思い—

本稿を書き終えるにあたり、学生と教員の関係は、盲人マラソンに似ていると感じている。学生は、どこかに進みたくてエネルギーを貯めている。でも、そこに道があるのか、その道は険しいのか、その道はどこに続いているのか。それら

は、見えにくいことが多い。教員は、伴走者として、彼らに状況を伝えながら、時に横を、時に半歩後ろを支えるように走る。共に悩み、共に汗を掻き、共に疲れるまでの時間が、教員にとって何よりの喜びであるが、気づけば彼らは一人で走っている。背中が小さくなるまで見つめていて、取り残された気持ちになる時が来る。

どんどん遠くまで走って行けると信じている。未来のランナーたちに大きな声援を送る。